ハルケギニアの大日本帝国

未熟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハルケギニアの大日本帝国

【Ｎコード】

Ｎ１４６０Ｈ

【作者名】

未熟

【あらすじ】

気づいた時には海外にいた陸海軍・民間人は本土にいて国外とは連絡がとれない？帝国は混乱状態に陥るもただちに偵察部隊を周辺地域に派遣するが偵察部隊から来た連絡に更に混乱する帝国であった。

プロローグ（前書き）

注意・この話は文章面で非常に稚拙な物です。
そこの所をご納得された上でお読みいただきまた、改善点やご指摘・感想等々いただければ幸いです。

プロローグ

ハルケギニア・トリステイン王国沖合い

大日本帝国海軍　第二航空戦隊旗艦・飛龍艦橋

加来(かく)艦長「司令、どう思われますかこの報告？」

山口司令「どうもこうも無い、艦長は誤認情報だと思うのかね？」

加来「いえ、誤認情報とは思いませんがさすがに・・・」

山口「確かに空想科学小説に出て来そうな状態ではあるが、複数機から同様の報告が入っている。航路にしても本土から逆算してまず間違いないはずだ。」

加来「・・・やはり我々は神隠しにでもあったのでしょうか？」

山口「かも知れんな、何せ月が二つも出るような所など今までの人生で、見た事も聞いた事もないからな。」

本土より南洋を偵察するよう言われた第二航空戦隊は昨夜すでに双月を目撃していた。

通信兵「艦長、呉より連絡です。」

加来「わかった。」

そう言って加来艦長は電文に目を通した。

山口「どう言って来た？」

加来「ソヴィエトや満州と言った、大陸があるべき場所は海になっているそうです。」

山口「南雲さんも大変だろう。」

加来「それと大至急呉に戻るようにと長官が」

山口「了解した、偵察隊が戻り次第本土へ帰還する艦長後は頼んだよ。」

はっと言って艦長は通信室に向かった。

山口（大陸が消失し大陸が突如現れる、これは軍人の手にはおえんな）

司令がそんな事を思っている間にも帝都では鳩首会議が開かれていたのだった。

第二話　首相の嘆き（前書き）

注意・この話は文章面で非常に稚拙な物です。
そこの所をご納得された上でお読みいただきまた、改善点やご指摘・感想等々いただければ幸いです。

第二話　首相の嘆き

大日本帝国帝都東京
　首相官邸
東條陸相「これは一体どう言うべきなのでしょうな？」
及川海相「海軍としても、現在本土周辺を偵察しているがソヴィエトも満州も朝鮮も樺太も消失していると報告が来たが・・・」
近衛総理「外地にいた軍民すべてが内地に突如現れると言うのは、尋常でないし国外とは音信不通になっている上、駐日大使館はドイツ大使館を除きどこもかしこも空き家だったと言う、在日外国人もなぜだかドイツ人とユダヤ人以外はすべて消えたと言うし正直私はこれ以上怪奇な事態が続いてほしくないと思っているのだがね。」

しかし、近衛総理の願いは叶えられなかった。

コンコン

海軍連絡官「失礼いたします。及川海相南洋偵察隊より連絡が入りました。」
連絡官は海相に書類を渡すと退出した。

及川「・・・・・」

近衛「海相、吉報ですかな？」

及川「それが、吉か凶か判断に悩む知らせです。」

近衛「と言うと？」

及川「マリアナ諸島があるべき所に見慣れぬ“大陸”があるそうです。」

近衛「・・・島ではなく“大陸”ですか。」

及川「その通りです。」

近衛「何かの間違いとはいかないでしょうね。」

及川「複数の偵察機から同様の報告があったそうですし、そもそもマリアナ諸島海域に上空から見て内陸が見えない陸地など存在しませんからな。」

近衛（事態はもはや私の手に負えない、第三次近衛内閣、短い内閣だったな。）

東條「・・・」

後に公表された近衛総理の日記にはこの日の事を

「まだ支那事変の方がマシだ」

と一言書いてあるのみだった。

第二話　首相の嘆き（後書き）

ご意見・ご感想ありましたらお気軽にどうぞ。

第三話　陸海軍再編

大日本帝国
呉・ＧＦ旗艦長門　会議室

「これが例の大陸の航空写真か」
目の前に置かれた写真の束を見ながら山本・五十六（いそろく）ＧＦ（連合艦隊）司令長官は尋ねた。

山口
「気に入りましたか長官？」

山本
「そうさな、少なくともマリアナとは似てもにつかないし、広大な森林地帯と気になる事ばかりだ」

黒島
「長官、これは陸戦隊を出しますか？それとも陸軍さんと一緒に送り出しますか？」

長官が重宝している変人参謀、黒島　亀人（かめと）はさっさと唾を付けましょうと言って来た。

宇垣
「先任参謀、それは無謀では無いのかね？どことも知れない土地に

安易に進出するのは」

黒島
「参謀長、どことも知れない土地だからこそ速やかに進出して情報収集をするべきではないのですか？」

宇垣
「ふん、情報収集ではなく既成事実の間違いではないのか先任参謀」

黒島
「これは手厳しい、で長官如何致しますか？」

宇垣　纏（まとめ）ＧＦ参謀長は、黒島先任参謀とは普段から中が悪く今回もまた条件反射的に慎重論を唱えた。
（注・先任と仲が悪いのは宇垣が大艦巨砲派である為、航空派の長官とソリが合わないと言う部分もあるが）

山本
「帝都じゃ近衛さんがまた弱きになっているらしいと言って来たし、食料を始めあらゆる物資の輸入が停止している今、大型艦や船団を軽々しく動かせないからね。ここは一先ず潜水艦で様子見をするしかないが、参謀長・先任、いつでも上陸部隊を動かせるように各地の陸戦隊員と輸送艦をここに集めといて欲しい」

宇垣・黒島
「はっ」

山本
「多聞悪いが、航空隊には当分陸で英気を養っていてほしい」

山口

「こればかりは致し方ありませんからな」

帝都・陸軍省

廊下を二人の男が歩いている。

「閣下、如何でしたか？」東條

「また悪い虫が出ているな近衛総理は」

「では」

東條

「いや、今暫らくは続投してもらわねば困る。今時局に総理が代われば臣民に余計な心配を与えるだけだ」

「・・・」

既に、諸外国との連絡が取れなくなり国外に居た軍民が本土と各港に艦船に乗った状態で

現れ政府がその対応に苦慮するその日の夜に、今まで一つしかなかった月が双月になっている事に国民は言い知れぬ不安感を抱いた。

ここ帝都も含め、各都市では小規模ながらパニックも起きていた。

東條

「それで、南洋はどうなっている？」

「現在第二航空戦隊が撮った航空写真を纏めております。明日の閣議には資料として配布されるそうです」

東條

「そうか、所で大陸と便宜的に言っているが何か聞いていないか？」

「漏れ聞くところによると、海岸地帯は見渡す限り手付かずの自然で内陸も森林地帯との事ですが」

東條

「人が住んでいる痕跡は？」

「今の所は確認されていないそうです」

東條

「まったく、外地と連絡が取れなくなり外地に居た者たちが突然現れただけでも我々の理解を超えているのに、月が二つに今度は未知の大陸か」

溜息とも諦めとも取れる事を言いながら、東條は大臣室の椅子に座った。

東條

「で、海軍は今どうしているのだ」

「先ほど傍受した所、海軍は陸戦隊と輸送艦を呉に回すようにと各鎮守府に連絡しております」

東條

「さっそく内陸への橋頭堡確保に動き出したか。こちらの師団再編

成の方はどうなっている？」

師団の再編成、それは大陸に展開していた支那派遣軍・関東軍・朝鮮軍が本土に帰還した為、実戦経験が特に豊富な部隊を中心に常設師団を再編成し選抜されなかった部隊・兵を解隊除隊し農業生産に復帰させようと言う応急策であった。

「あと二・三日程で、選抜が完了し各隊の移動・集合・訓練と開始しますので早急に動かせる師団は本土にいた四個師団と近衛師団しかありませんが」

東條

「近衛は動かす訳にはいかんから、取り敢えず再編が終わるまで四個師団には何時でも動けるようにしておけ」

「了解いたしました。それから、既に解隊して余剰になった兵器も回しておりますので四個師団に関して充足率は問題ありません」

東條

「よろしい、出兵が有る無いはどちらにせよまだ先になる。四個師団あれば当分は不足しないだろう」

しかし、山本長官・東條陸相の予想は一月もしない内に変更を余儀なくされる事になる。

第三話　陸海軍再編（後書き）

ご意見・感想ありましたらどうぞお気軽に。

第四話　遭遇（前書き）

ハルケギニアに住む方々が若干ではありますが表れだします。

第四話　遭遇

異世界へ突如飛ばされた大日本帝国は、国内の動揺を安定させる事に僅かな期間とは言え時間を掛けねばならなかった。

同時に、海軍は燃料確保の為大型艦艇を順次予備役に編入する事態も起きていた。

そんな中、同じ海軍でも潜水艦隊は閣議の結果政府関係者一名・陸軍一名を乗せて、大陸偵察を活発に行なっていた。

そして、偵察からの帰路に帝国は混乱後初めて自分達以外の者と遭遇したのであった。

旧小笠原諸島近海

イ〇〇

夜間・明け方の偵察を終え、それなりの情報を得たイ号は横須賀を目指していた。

外界がどうなっているか、警戒は必要だがイ号は浮上航行していた。

潜艦長

「何か変わった事はないか」

見張り
「は、今の所水上・上空ともに異常ありません」
見張りの報告を聞き、潜艦長は改めて辺りを見回した。
（景色だけ見てれば代わり映えないんだがな）
哀愁に浸っていた潜艦長はしかし、見張りの声で引き戻された。
見張り
「右上空何かいます」
潜艦長
「うん、どこだ」
潜艦長が右上空に双眼鏡を向けると、確かに雲の中に薄らと影らしいモノと微かではあるがエンジン音にしては変な音も一瞬聞こえた。
潜艦長
「通信、付近を飛行中の友軍機かどうかまた横鎮（横須賀鎮守府）にも紹介確認」
・
・
・
通信員
「潜艦長、応答ありません」
通信員
「横鎮から、この海域に友軍機は飛行していないとの返信です」

報告を聞いた潜艦長はしかし、用心の為臨戦態勢に移行した。
その直後、右前方の雲の下から黒煙と火を吹き出している“帆船”が落ちてきた。

陸軍・政府派遣官
「潜艦長、あれはいったい！？」
飛び出してきた二人に潜艦長は
「本官が聞きたいものですが、少なくとも墜落する事は間違いないですな」

見張り
「潜艦長、上空になっ、り、龍が見えます！！」

潜艦長・陸軍・政府派遣官
「なにっ」

三人が、空飛ぶ帆船から視線を上にすると確かに“龍”らしきものが幾つか存在した。

潜艦長
「総員、急速潜航」
龍？の存在を見て一瞬戸惑ったが、次の瞬間には即座に命令を下した。

ガチャン

政府派遣官
「潜艦長、いきなり潜航するのはどうなのかね？それに救助は？」

潜艦長
「救助活動をしないわけではありませんが、まずは艦の安全を保つのが先です」

陸軍派遣官
「確かに、あの龍が襲ってくるとも知れませんし何処の何者ともしれない者なのですからな」

政府派遣官
「しかし」
政府派遣官は、それでもやはり納得がいかないようだったがそれ以上は口に出さなかった。

暫らくして、音響から大きな水音が聞こえたと報告が来た。

それから更に十五分程、無音潜航してから墜落海域へと向かった。
そしてイ号乗員は遭遇したのであった。

第四話　遭遇（後書き）

ご意見・御感想ありましたらどうぞ

第五話　支配人ト監督、復帰

がたがたと、揺れる道を一台の車が走る走る。

「海軍のイ号が拾ったのはトンでもない代物だったそうだな」

後部左席の男は右隣の男に言った。

「概略はさっき言った通りだ。詳しい事はこれに書いてあるから読め」

分厚いファイルを男は渡した。

「それで、他には？」

「言った通りにしろ、後は貴様の好きにしろ」

「随分、素直じゃないか？えっ」

車から降りながら左の男は言うが、車内からの返事は

「黙れ」とその一言だけだった。

遠ざかる車を眺めながら男は

「順調か？」と聞いた。

影が一つ現われた。

「ええ、キネマと言うのはどこに行っても婦女子には有効です」

「敵情は？」

「一人詳しい者が居たので、聴き取りは完了していますよ」

するともう一つの影が現われた。

「また王族を担ぎ出す事になるとは因果は巡るか？」

「とんでもありませんよ、連中は革命軍と言えど貴族の集まり、赤熊に比べればどうと言う事はありません」

キキーッ

車が停まった。

「もう一度、もう一度機会が巡って来たんです。しかも今度はあの上等兵殿が確約してきましたからな」

「俺も、軍の解体でまた機関長になる予定だ」

窓を開けてから男は薄ら嬉しそうに言った。

「今度は満州なんて小さな器が目標では無いので、苦労が尋常では無いですがお願いします板垣司令」

遠ざかる車にそう呟く男、石原　莞爾（かんじ）陸軍“現役”中将は月下に満面の笑みを浮かべていた。

第五話　支配人ト監督、復帰（後書き）

感想などお気軽にどうぞ

第六話　会談

帝都・首相官邸

この日、大日本帝国総理大臣近衛　文麿（ふみまろ）を始め第三次近衛内閣の閣僚と陸海軍有力者が一同に集まり会談が催された。

そもそも、このような会自体は遅かれ早かれ帝国の今後を考える為に予定されていたのだが、二月程前に伊号潜水艦が南洋大陸（ハルケギニアの帝国側呼称）からの偵察の帰路に墜落する帆船を目撃、墜落海域に向かった所重傷者四名を救助したのが事の発端であった。四名は直ちに、艦医の応急措置を受け横須賀帰港後そのまま海軍病院に入院した。

三日後昏睡状態から覚めた四名に対し、早速軍医立ち会いの下事情聴取が行なわれた。

“彼女”等は、自分達はアルビオン王国王族とその侍従であり、革命が起こったので亡命しようとしたが、途中で革命軍の追っ手に追いつかれて撃墜されたのだと言った。

（彼女達は妙な訛りはあるものの英語が喋べれた）

通訳兼取調官は、相手が王族であり尚且つ“亡命”の身と聞くやただちに上司へ連絡し昼頃には急遽閣議が開かれた。

臨時閣議では、相手が亡命王族と言う事・イ号乗員の目撃情報を考慮し、更なる事情聴取と早急に会談日程を組む事になった。

しかし、陸海軍は石油等の物資節約・確保の為の再編成中で、相手

が療養中の身でもあるので会談は臨時閣議より更に二月が過ぎた頃に開かれた。

王女
「会談を始める前に、何処の誰と知れぬ身であった私達を助けて頂き、丁重な治療をして下さった帝国の方々にお礼を申し上げます」
王女が立ち上がり、王女の背後に控えていた三名（侍従長・親衛隊長・小姓）共々お辞儀をした。

近衛
「お気になさらずマリア王女、我が国としては当然の事をしたまでです」

マリア
「ありがとうございます近衛総理、そう言って頂けると撃墜と言う不運に出会いましたが天には見捨てられなかったと思えます」
そう言ってからマリアは周囲の列席者を見回して言った。

マリア
「本来ならば、帝国の方々にはそれ相応の礼を示すべきなのですが我々は残念ながら亡命の身であります。ですが今日までの献身的な治療の数々を受けた者としましては出来る限りのご要望にお答えしたいと思っております。どうか遠慮なくご要望お聞かせいただけないでしょうか」

「マリア王女、失礼ながら貴女は今自身が亡命の身である事を言った矢先ではないですか。それをご要望と言うのはどう言う事ですか

？」

マリア
「確かに仰るとおりですええと」

石原莞爾
「失礼しました、陸軍中将の石原　莞爾（かんじ）と申します」

マリア
「ああ、満州でのご活躍は見させて頂きました石原中将」

石原
「これはまたありがたいですがマリア王女、してお答え頂けないでしょうか？」
石原は不敵にも手を組んで面白そうに見つめてきた。

マリア
「中将のご質問は、お集まりの皆様も疑問を持たれている事でしょう」
そう言って改めてマリアは列席者を見回し宣言した。

マリア
「私、アルビオン王国王女マリア・アンナは大日本帝国に二つの提案を致します。

一つは亡命政権樹立を許して頂きたい事、もう一つは今までの返礼として国土回復の折りには限定的ではありますがアルビオン王国を帝国保護国として、また各種協力をする用意がある事をここに宣言します。」

近衛
「なっ！！」

石原
「ほ～」
会議室はマリア王女の爆弾発言に愕然とした。

第六話　会談（後書き）

感想等ありましたらどうぞ。

第七話　陸軍への贈り物

マリア王女の爆弾宣言により会議は其処彼処で話し合いが起こり、昼時に差し掛かっていた事もあり一時休憩となった。

休憩中、陸軍との個別会談を行いたいと王女が要望した為に午後の会議は個別会議終了後に再開する事となった。

陸軍会議室

マリア王女と親衛隊長であるタリアが着席していた。

東條
「さて、マリア王女先程の宣言はどう解釈すればよろしいのでしょうか？」
マリア
「そのまま、額面通りお受けしてください東條陸相」

石原
「額面通りお受けしても構わぬが姫、我々がそのまま併合してしまう可能性もあるのではないですかな？」

マリア
「その可能性はあるでしょう。しかしあなた方に強行策を押し通せるだけの猶予がありましょうか？どことも知れない土地に兵を進める無駄等今の帝国には無いと思うのですが？私としては、幾つかの条件さえ承認していただければ今後も帝国の良き友としてまたホストとしてエスコートする事にやぶさかではありません」
東條陸相を始め室内の者達は一様に考えあぐねていた。

東條
「資料によると大分貴国は鉄や石炭は取れるそうだが、工業等で我が国と開きがあるようですな、採掘現場から現地での武器弾薬の生産まで時間が掛かる上、鉄道も無いとなると陸軍としては戦いに負ける気は全く無いが物資が心許ない。仮に、我々が手を貸すとしても帝国の現状を鑑みるに良くて王女様の身を守る為に兵力を割く位で、保護国と言うのは受け入れ難いですな」

東條はやんわりと王女が帝国保護国となり、近代化しようとしているのを受け入れられないと言った。

マリア
「陸相殿のご意見は最もです。我が王国は貴国に比べあらゆる面で見劣りする事は否定致しませんが、一つだけ我々に在って帝国無いモノがあります」

東條
「それは魔法と言うものですかな。しかしそれとて所詮は魔法使い、ああ失礼メイジと言う貴族個々人に依存するモノと提供していただいた情報にはありますが？」

マリア
「確かに、魔法はメイジ個々人に依存する物ですが何も戦の道具に使うだけが魔法ではありません」

マリアはそう言うと傍らにいるタリアに二本のビンをテーブルに置かせた。

マリア

「これは、先程無理を言って分けて頂いたガソリンの入ったビンと何も入っていないビンです」

石原
「それを一体どうする気ですか姫？」

マリア
「こうするのです」
マリアが杖を振るった瞬間、閃光と共に何も入っていなかったビンの中にガソリンと思しき液体が存在していた。

東條
「これは！！」

マリア
「陸相、先程言ったとおり魔法とは戦に用いるばかりが魔法ではありません。今はこれだけですが条件さえ調えばいくらでもガソリンを海軍では無く“陸軍”に優先供給したいと思っております」

陸軍一同
「・・・」

石原
（この姫様は中々面白い御仁だ。短期間の内に石油の価値を理解された上に海軍では無く陸軍を優先すると言ってくるとは甘粕は少々キネマを見せすぎたか）

内心、しまったと思っているのは東條もまた同じであった。

東條

（わざわざ陸海軍で個別に会談したいと言いだした時は、何を考えているのかと思ったがこれ見よがしに魔法を使いあまつさえ陸軍を優先すると言ってきたか。石油不足の今、海軍への抑えとしても非常に有益だがこれに乗るべきかどうか）

東條と石原が考え込む中、一人の参謀が立ち上がった。

「陸相、これは千載一遇・天佑神助であります。魔法を使えば我々の目の上のタンコブである石油問題は一挙に解決するばかりか、この気に海軍を抑え円滑な指揮体制を構築するべきです！！」

一気に言い切ったこの男、辻（つじ）　政信（まさのぶ）はマリアの方を向き言い放った。

辻

「マリア姫、条件さえ揃えばと仰いましたがその条件とは！？お聞かせ願いたい！！」

辻の言い方に、内心無礼なと感じたタリアではあったがそんな事は一切顔に出さずに姫に代わり説明をはじめた。

タリア

「その件に関しては私がご説明致します」

「貴官は確か・・・」

タリア

「親衛隊隊長タリアです辻政信参謀。ノモンハンでの“ご活躍”は伺っておりますよ」

一瞬のしかし厳しい睨み合い。

タリア

「一つ目は、石油の成分についてです。これは触媒を通して一度により多くの石油を錬成する為です」

タリア
「二つ目は、先程も言ったとおり国土回復の為の兵力を出して頂きたく事この二つが条件です」

東條
「確かに、石油問題が解決するのであればこちらとしても当初よりは多くの兵力を出す事も出来るがしかし、仮にも一軍を出すとなると現地を知った者が必要になりますが帝国に居られるのはマリア王女を含め四名しか居られない。しかも王女を最前線に出す事は危険を伴うので必然的にタリア殿あなたが水先案内人になってもらうしかありませんが、それとてタリア殿に何かあれば作戦は遅延してしまいます。この件について何か対策はありますかな？」

タリア
「陸相閣下のご指摘は最もですが、ご心配には及びません。革命が起き亡命する際に船が小さかった為親衛隊の大半を一時解散し領地に帰してあります。来るべき反攻に備えて」

石原
「なるほど、これで一先ず現地協力者は確保できますな陸相“閣下”」
眉を一瞬釣り上げた陸相ではあったが、指摘した問題は解決したのであった。

東條
「宜しい、それでは帝国陸軍としては派兵に反対する理由がありません。ですがまだ幾つか細かい点について協議せねばならない点がありますのでよろしいですかなマリア王女？」

マリア
「“陸軍”が協力して頂けるなら我々に反対する理由等毛頭ありません」
そう言ってマリア王女は微笑した。

第七話　陸軍への贈り物（後書き）

ご意見ご感想ありましたらお気軽にどうぞ。

第八話　海軍茶会（前書き）

注意・このハルケギニアの大日本帝国は、ご都合主義的・趣味・架空人物を含んでいますので不快感を催す方はお読みに成らぬのが吉です。

第八話　海軍茶会

マリア王女とタリア親衛隊長が陸軍と会談をしているほぼ同時刻。
暇を持て余していたマリア王女の侍従長マリューと小姓のライは、
山本長官の誘いを受け海軍軍人数名が居る部屋に居た。

山本
「早速ですが侍従長殿、先程王女様が仰った事はどう言う事でしょうか？ご説明頂けると助かるのですが」

マリュー＆ライ
「もぐもぐもぐもぐ」

しかし、二人は出された菓子を口に入れる事が忙しく聞こえていそうになかった。

（山本さん）

小声で言ってきたのは井上成美第四艦隊司令長官だった。
（こりゃ～トンだ外れじゃないですか。仮にも助力を求める立場の、しかも侍従長と言う立場の方が非公式とは言え、このような場で緊張感がカラッキシ感じられないと言うのは。しかも小姓と言うのはつまり・・・）

山本
（井上君、言いたい事も分かるが御婦人を見た目で判断してはいけないよ）

山本長官はしたり顔で言った。

井上司令は「そんなモノか？」と内心思った。

そうこうしている内に、侍従長が食べおわったので長官は改めて侍従長達に向かって言った。

山本

「姫は、我々帝国の力を借りて王国再建を目指されるお積もりなのは分かりますし各種技術を提供して欲しいのは分かりますが、幾ら近代化の為とは言え保護国とは限定的とは言え支配下に入る事、我々が裏切るとは思わないのですか？」

山本長官の疑問はもっともな話だった。

国土回復後にわざわざ保護下に入るとは、何を考えているのかと思うのは当たり前の事である。

　例え近代化云々と理由があれど、それだけなら他に手段もあるはずそもそも事前に親衛隊長タリアから聴取した事はどこまで信じるべきなのだろうか？

革命軍の武器・組織についての情報は一定の信頼度はあるだろう。

帝国陸海軍から見れば赤子の手を捻るような物であった。

若干の問題点は“魔法”と言う昔話に出てくるモノが存在し帝国軍人がその“魔法”をどう認識するべきか扱いかねているという事だろう。

マリュー

「え～とえ～と言った通りで良いと思います。ねっライちゃん」

マリューは、今だに菓子を頬張っているライに確認をしたがライはキョトンとした顔をするだけで、また菓子を頬張り始めた。

海軍側
「・・・（冷や汗）」

マリューはこちらに笑顔を向けたままだった。

「ニコ～」

海軍側
「・・・」

海軍としては、王女が陸軍と会談すると言う事に不快感を持つ者が多数居た。
ただ、運良く侍従長と小姓が暇を持て余していたので（巻き返しの意味を込めて）お茶に誘ったのである。

王女を陸軍に採られたのは痛いが、こちらは侍従長である。
決して不可能では無い、条件が圧倒的に不利ではないだろうと思っていたのだが、目の前にいる侍従長はどう見てもその職と能力が一致していない、厳しく言えば誰が見ても“侍従長”とは思えない人物なのだ。何せ、海軍側との話し合いの為来室してから言った第一声が

マリュー
「こちらの菓子はおいしいですね～」

だったのだから。

思えばあそこからどうも不安を抱いたと言えばそう思えなくもないと、山本五十六始めこの場の海軍軍人達は思い始めていた。

マリュー
「あの～」

山本
「何でしょうか侍従長？」

マリュー
「ライちゃんがその～」

見れば、マリューの隣で先程まで菓子を頬張っていた“少女”が何か俯いてソワソワしていた。

山本
「ああっ、これは失礼しました」

そう言って、表に居た衛兵に案内を頼みマリューとライは退席した。

「ふ～」
「さてさて」
事態を静観していた者達が一様に、口を開き始めた。

及川
「情勢は甚だ不利と考えるべきだろうか？」

顔色悪い海相は述べた。

井上
「現段階ですべてを諦める決定は早計ですが、本官の意見としては覚悟を決めておくべきだと思います」

豊田
「覚悟とはつまり・・・」
豊田　副武(そえむ)海軍大将・呉鎮守府司令長官は、真意を述べて欲しいと言ってきた。

井上
「覚悟とは即ち」

山本
「海軍戦力の削減と陸軍への戦力供給と言った所だろう」

豊田
「むっ！！」

豊田副武、海軍内でも陸軍嫌いで有名な者であるこの男には承諾できる話ではなかった。

高木
「やはりそうなるのは避けられませんか」

海軍省勤務　高木　惣吉(そうきち)大佐は静かに呟いた。

豊田
「将兵が我々が、今まで訓練してきたのは陸軍の為では無い！！」
テーブルを叩き立ち上がるや出ていき兼ねない勢いで豊田大将は言

った。

「マリアとか言う姫様は帝国海軍の力を分かっていないのだ。山本さん、戦艦の二、三隻の一斉射撃でも見せればそのような事はせずとも良いのではないですか？」

山本

「豊田君、そう焦るなそもそも物資節約のこの時勢に砲弾一発は特に貴重だよ」

砲弾には希少金属を使う部分があるので、よほどの事が無い限り発砲は厳禁とする通達が回されていた。

高木

「鈴木さんに頼むことは無理ですか？」

井上

「高木君、君にしては軽率な発言じゃないかね。我々は陸軍のような不作法者とは違うと思うのだが？」

高木大佐が暗に元海軍軍人で侍従長である鈴木貫太郎経由で大元帥陛下に頼めないかと言ってきたのを、井上は陸軍を引き合いに諌めた。

高木

「時と場合によります。これがまだ、我々の世界でならばこのような事を私も言いませんが“魔法”等とお伽話に出てくるモノが存在する世界に来たとなれば話は違います。しかも革命で王制打倒と言う騒ぎもあると聞かされれば、頼れるの力ではありませんか？」

山本

「豊田・高木両名の意見は分からないでもない、だが陸さんに艦隊いや戦隊の運営をするだけの人員やノウハウがあるかい？仮に陸軍

の指揮下に編入されてもいざとなれば無理が出来ないわけではない。その時は僕の首を差し出そうじゃないか」

「・・・」

豊田大将も、適当な言葉が見つからず着席し他の将官もそれに習った。

山本

「さぁまもなく二人が戻ってくる頃合いだ。この場は客人を遇し、次の機会に繋げようじゃないか」

高木

「ありますかね。次の機会は」

井上

「希代のギャンブラーに賭けるしかないだろう。でしょう山本さん」

山本

「・・・」

・・・・・・・・・・・・

・・・・・

某所

「けっ、どいつもこいつも人の事ジロジロ見やがって見せ物じゃね～ぞ」

その人物は先程から悪態をついていた。

「あの部屋にいた連中は、どいつもこいつもイケスカネエーぜ。ああ疲れるぜ」

こんな愚痴を続けながら、しっかり菓子を噛っているのはどうかと思う行動だが・・・

「～～～」

呼ぶ声が聞えてきた。

「もうそろそろ行くか」

王女への海軍軍人の様子をどう報告するか菓子を噛りながら考える小姓ライの姿があった。

第九話　決意（前書き）

注意・このハルケギニアの大日本帝国は、ご都合主義的・趣味・架空人物を含んでいますので不快感を催す方はお読みにならぬのが吉です。

第九話　決意

三々五々に、会議室に集まり始めた。

近衛首相は、東條陸相と石原中将と何か相談している反面、海軍側は余り顔色が良くなかった。

近衛
「・・・」
石原
「〜〜〜」
東條
「・・・」

暫らくして、マリア王女らが入室すると近衛首相達も着席し会議は再開となった。

マリア
「いかがでしょうか、亡命政府樹立と支援について帝国の総意をお聞かせ願えないでしょうか？」

ゆっくりと、しかしその言葉には自信が満ちていた。
近衛
「その前に、幾つかお聞きしたい事があります」

「なんでしょうか？」
「仮に我々帝国が否と言った場合、王女様方はいかがなさるお積もりか聞かせて頂けませんでしょうか？」

「仮に、もしそのような返事でしたなら我々としては手立てがありません。せめて大陸へ戻して頂ける事ができましたら、ガリアかトリステインかゲルマニアにでも助力を求めようと思いますし、このまま帝国で余生を過ごすのも許可して頂けるなら構いません」

石原
「姫、それは本心からですかな？それとも」

マリア
「可能性を提示したまでです石原中将。ですがその場合、命の恩人たる帝国のお立場を思いますと苦しいばかりですわ」

・・・媚ではなく、しかし心配でもないそれはまさに事実。

近衛
「帝国は、残念ながら窮しています。食料、資源、あらゆるモノが不足している。人はパンのみに生きるのではありませんがパンが無ければ生きれません」

マリア
「・・・」

近衛
「マリア王女、後程幾つか提案がありますがそれを認めて頂けるのでしたら・・・帝国はアルビオン王国王女マリア・アンナ・テューダーに助力を惜しみません」

「・・・」

東條や石原陸軍将官達、山本や井上ら海軍将官達、そして近衛総理

等は一様にマリアを見つめ返答を待った。
ある者は憮然と、またある者は笑みを浮かべこの魔法使いのお姫様が紡ぐのを待った。

マリア
「・・・助力をして頂けるのでしたら、私は口が裂けても否とは言えません。提案については、後程“協議”すると言う事で宜しいのですね？」

近衛
「ええ、“協議”すると言う事で構いません」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

後にハルケギニア大乱と呼ばれる劇の幕はこうして上がった。

第十話　現地工作（前書き）

注意・本作品は、ご都合主義やオリジナルキャラ等の要素がでております。ますのでご理解した上でお読みください。

第十話　現地工作

「これより反攻作戦の具体案を述べるが、各員覚悟は良いか？」

会議より三月、場所は旧アルビオン王国旧マリア・アンナ領の郊外に在るあばら家。

今宵、あばら家にはかつての親衛隊の面々が集まっていた。

親衛隊、それはマリアが領地改革をする過程で創設された農民や商人、猟師や流民からなる自衛組織が基となった軍事組織であった。

表向きは、マリア亡命に辺り革命勢力からの攻撃から隊員を守る為、解散した事になっているが実際は解散後も幾つかの集団に分かれて、来るべき反攻の日に備えていた。

そして、親衛隊隊長タリアが帰領すると同時に組織は再び統一体制、帝国との協力体制に移行しつつあった。

・

・　・　・　・　・

上座に座るタリアは、席を共にする同志達に言った。

「はっ」

それに答えた幾つもの声、声、声

「今回の戦はただの王国再建と言ったモノが目標では無い、我々はマリア様のそしてその先にある理想を成就させる為に戦うのだ」

「おおっ」
「とうとう」
待ちに待った時が来たと騒めいた。
「で、我らがお嬢は何時戻ってくるのじゃ？」
この場に集った中で、最高齢の同志が聞いてきた。
タリア
「今はまだ、ただ先になるとだけしか言えません」
「ふん、まだまだ先か。で例の輸送は続けるのか？止めるのか？」
タリア
「今暫らくはお願いしますが、定員はあと一・二回で揃いますので以後は指定資源のみお願いします」
「分かった」
そう言って老体は出ていった。
その後、革命軍の情報や王党派の状態を整理しタリアは言った。
タリア
「諸君、もう暫らくの辛抱だ。この地に再び“我らが旗”が翻るのは姫様の決定事項だ」
「！！」
まだ小さい存在だが、強い灯りをアルビオンに灯ろうとしている。
それは、長く暗闇に閉ざされていたハルケギニアに灯りを付ける事にも繋がるのだが、それはまだ先の話

第十一話　現地工作・二（前書き）

注意・本作は全編通して、ご都合主義的やオリジナルキャラ等もでておりますのでご理解した上でお読みください。

第十一話　現地工作・二

神聖アルビオン共和国
首都ロンディニウム

「糞の中だな」
汚れたマントを身に付けた男は連れに言った。

「糞の中とはまた」

「糞を糞と言わずなんと言うのだ？非効率なこの社会、そしてこれが革命だと？共和国だと言うのか」
男から見れば、茶番どころか汚物を見るような感じなのだろう。

（無理もないか）
連れは男の経歴を思い返していた。先の欧州大戦、しかも一番の激戦地であった西部戦線で男は戦うが、祖国では革命により帝政が崩壊し残ったモノは荒廃した祖国と天文学的な賠償金、そして貧困と共産主義との争いだった。

その渦中にあって男は行動し続け、いまに至のだから。

「そろそろ宜しいですか？他にも、見て回らねばならない場所がありますので」

「これ以上此処に居た所で意味が無い。さっさと帝都に戻りたいのだがな」男は連れに言った。

「私としても、こんな所には何時までも居たくありません。ですが、残念な事に貴方の力が必要なので今暫らくは“肥料倉庫”に滞在して頂きたい」
連れが言い終わるか終わらない内に、男は急に笑いだした。
男と行動するようになり、毎日のように変化の無い機嫌の悪い表情を見ていた連れにすれば、笑うと言う仕草が不思議でならなかった。

「肥料倉庫か、それは面白い事を言うな。貴様にとってここは肥料倉庫に見えるのか？革命とは名ばかりの、私利私欲の貴族共が自称する共和国と虐げられた国民しかいないここが肥料倉庫か」

「・・・正確に言うと、まだ肥料でも無ければ倉庫でもありません。我々の仕事は二つ、肥料を作る事と作った肥料を保管する倉庫を作る事です。お忘れですか？」

「ふん、生き甲斐を忘れるなどとんでもない。私が呼ばれたのはだからなのだろう？」
そう言って、男はその場から去って行った。
連れは、痩せ細った平民やその死骸、その中に立つ王宮をもう一度見やり後を追った。

第十二話　軍港の賑わい？

兵庫県播磨造船所

この日、陸軍所属の舟艇母艦神州丸は改装工事を終了し再就役した。

「で、これが“浮く”のかね？」

「はい」

「本当かね？」

「常識なんですよ～」

旧第二十五軍司令官、山下奉文（ともふみ）陸軍中将は侍従長マリューの“常識”を聞いて一瞬不安を感じたが、視線をあきつ丸に戻した。

この度の、神州丸再就役はアルビオン“解放”の為の一環であった。神州丸は、上陸戦を迅速にする為に建造された鑑であるが、アルビオンは浮遊大陸で水上鑑による通常の方法では上陸が困難と言う事が分かった。

その為、一時は爆撃機・輸送機による空輸も考えられたが、燃料在庫や上陸後の補給の維持が困難な為航空支援と武器給与を中心とした案が出されたが、アルビオンの地下組織（親衛隊が来るべき反撃に備えて結成した）より風石が届いた事により上陸作戦の問題は解決した。

マリュー

「早く浮きませんかね～」

山下
「まずは沖に出てからになる」
「ここで浮くんじゃないんですか～？発表だってしたんですよね？」
「何事も順序と言うものはある。こちらとしても、今はまだ慎重に進めたいのだ」
ここハルケギニアと言う地に日本が来てから、政府は正式発表を控え厳戒体制を布いていたが、当然各地では不安が高まっていた。運良く、マリア王女の大日本帝国への“亡命”とアルビオン亡命政府の樹立が決定された為、帝国政府は慎重に情報を選び逐次発表していた。当初、不測の事態に備え各都市や要地では軍が配置されていたが混乱や暴動は殆どなかった。
理由は、月が二つになった事と各地で獲れる見た事もない魚の数々が原因であった。人の手ではどうしようもないこの変化が、人々を納得させたのであった。

「いくら発表したとは言え、昨日まで存在しなかった事をそう軽がるとは出来ない」
山下はそう言って、副官の持ってきた書類に目を落とした。

マリュー
「・・・」
しかし、基本的にやる事が無いマリューは最初の内こそ物見遊山にあちらこちらを見物していたが、それにも飽きてしまい近くにあった木箱に腰掛けていた。

マリュー
「やる事が無くて暇ですね～」

しばらく腰掛けていたが、ある事を思い出した。
造船所到着後に聞いた、報告では工事は終了し後は積み込み段階だけであると言っていた。ならばそれを手伝えば早く用事が済むのではないか？
マリューは考えるが早いかさっそく行動に移った。

マリュー
「山下さん、積み込む物資はどこに置いてあるんですか？」

山下
「・・・何の御用ですかな侍従長？」
瞬間山下の脳裏には、マリュー侍従長が同伴する事に決まった時聞いた、注意事項を思い出していた。

曰く、率先して何か聞いてきたら無難な返答をするようにと

マリュー
「お手伝いしようと思いまして」

手伝いと言っても、山下や副官達は案の定どうしたものかと思っていた。
注意事項は、無難な返答に続いて子供でも“出来る”事のみと通達されていた為だが
（司令、若干の遅延も起きてますのでこの際荷物運びを手伝って頂いてはどうでしょうか？）
傍らにいた補給参謀が侍従長に聞かれないよう小声で具申してきた。
山下もまた、空飛ぶ軍艦等と言う得体の知れぬモノを指揮する以上一刻も早くそれに精通する必要があると思っていた為、参謀に倉庫まで案内するように言ってしまった。

暫くして、遠く倉庫方面から盛大な音が聞こえて来た時に山下は自らの指示が間違っていた事に気付いたが遅かった。
結局、二日間の遅延の後に神州丸は運航試験を開始しその航行性能は同席していた造船技術者・軍人等をして大いに満足と貴重なサンプルを与える事となった。
各造船所では早速輸送艦や空母・巡洋艦・駆逐艦の改修工事に移行、更に“陸軍”は今回得られたサンプルを基に大規模な飛行上陸艦隊創設の青写真を引き始めたのであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1460h/

ハルケギニアの大日本帝国

2010年10月11日12時44分発行